

1

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

晴香と奈穂は山下小出身で、幼稚園のころからの幼なじみらしい。わたしは小学校が違ってから、知りあつて、まだ二週間。二人の会話が通じないことが、たくさんある。そのたび、澄ちゃんとヨッコを思い出して、悲しくなる。

澄ちゃん達とは、四年生の時からの仲よしだった。けど、澄ちゃんが私立の女子中に行くことになって、「二人で美術部に入ろうね」って約束したヨッコも、おじさんの急な転勤で、卒業式が終わるとすぐ、千葉に引っ越してしまった。

澄ちゃんと離ればなれになることは、二月の合格発表の時からわかった。だから、放課後はなるべく三人で過ごしたり、休みの日にいろんなところに遊びに行ったり、それなりに^①覚悟はできていた。けど、ヨッコはあまりにとつぜんで、今もまだ悪い夢を見てみたい。

シヨックから立ち直れないまま、迎えた入学式。体育館の受付で渡された新しいクラスの名簿に、知ってる名前もいくつかあつたけど、二人の他に親しい友達がいなかったわたしは、式が終わった後、緊張した心細い気持ちで教室に向かった。そして、黒板に描かれた座席表の通り、廊下側の一番前の席にポツンとすわつた。と、

「キヤーッ、ラッキー！ いつも一番なのに、二番！」

耳もとでとつぜん、にぎやかな声が出た。顔をあげると、背の高い、いかにも活発そうな女の子が立っていた。

「南小？ でしょ？ 見たことないもんね。あたし、山下小。クラス、ちょうど半はんみたいね」
目があつたとたん、ニコツと笑つて、すぐ後ろの席にすわつた。わたしは初対面の人と話したりするのが苦手。けど、そんなことにはまるでおかまいなしで感じて、ぺらぺらしゃべり続けた。

「新学期つて、席が出席簿順だから、いやんなっちゃうのよね。けど、今年はあるのおかげで、一番前じゃない。あんた、『あおい』でしょ？ あたし、『あだち』だから。ね？」

うれしそうに名簿をつき出して、「青井沙良」のつぎの「安達晴香」つてところを指さした。わたしも小学校の時から、新学期はいつも気が重かった。

（へえ、^②同じようなことを考えてるんだ……）
急に親しみを感じて、

「いいな。わたしは、今年も一番……」

^③わざと大げさに、しょんぼりして見せた。

「そっか……『青井』じゃ、二番になるのはむづかしいよね。もう、前なんていないんじゃない？」

「そんなことない……相沢、相原、相本……」

「すごい。よくポンポン出るね」

「だって、いつも考えてたから……」

「わかるう、その気持ち」

二人で顔を見あわせて、思わずブツとふきだした。^④ 初対面の人と、あんなに話せたなんて、自分でもびつくりだった。(よかった。話しやすい人で……)とホツとしてると、「ね、下の名前、なんて読むの?」と聞いてきた。

ドキッとした。^⑤「瞬(どうしよう)と迷ったけど、答えないわけにいかない。」

「さう」

小さな声でコソツといった。なのに、

「サラ?へえ、沙良か!カッコいい。アイドルみたい」

まわり中に聞こえるような大きな声でいわれて——あの時は、急いで教室から逃げ出したいほど、はずかしかった。

人見知りっただけじゃなく、わたしが初対面の相手が苦手な、もうひとつの理由が、これ——。

新しいクラスになって、先生が初めて出席をとる時。名前を呼ばれた瞬間、小さな声で返事して、急いで下を向く。たいてい、男の子の誰(だれ)かが、

「えーっ、青い空?」

大きな声で聞き返すからだ。音で聞くと、確かに「青い空」って聞こえる。

「空じゃない、サ・ラ・だ」

先生がまじめな顔でいい直すと、

「サラダ?」

今度はそんなふうになぜつかえされて、みんながゲラゲラ笑いだす。そのうち、

「でも、サラなんて、カッコいいよね」

女の子達のひそひそ声が聞こえて、

(えーっ、あの子?)(なーんだ、あの子か)

そんな反応が手にとるように伝わってきて、体がキュッとちぢこまる。

苗字(みょうじ)が出席簿の一番っただけでも、じゅうぶん目立つのに……わたしは目立つことが、すごく苦手なのに……だから、わたしは自分の名前が、大っ嫌い。

つけたのは、ママ。「則子(のりこ)」という名前が、地味でふつうすぎるのが、ずっといやだったって。女の子が生まれたら、もっとおしゃれで、すてきな名前をつけるのが夢だったって。ちなみに、三コ下の妹は、玲奈(れな)。小さい時は、「字がむつかしくて、やだ」って、もんくいってたけど、最近はけっこう気に入ってるみたい。人なつっこくて、誰にでもかわいがられるタイプの子だから、玲奈には「玲奈」って名前が似合ってるって、わたしも思う。でも、わたしはもっとふつうの名前がよかった。「沙良」なんて、絶対わたしには似合わない。だれだって、そう思うに決まってる。口に出したら、『そんなこと、いちいち気にしてないわよ。自意識過剰(じいしきかじょう)じゃない?』っていわれそうで、いつもテキトーにニコニコ笑って、ごまかしてきたけど……。

実際、注目されるのは最初だけ。後はふつうに「青井さん」だった。今まで、下の名前で呼びあった

のは、澄ちゃんとヨッコだけ。だから、今度も、そうだと思ってたのに、晴香は、入学式の日からずっと、わたしを「沙良」って呼んでいる。初めは、ひどく落ち着かない気分だった。でも、幼なじみの奈穂(なほ)を紹介(しょうかい)されて、毎日二人に「沙良」「沙良」って呼ばれてるうちに、なんだか少しづつなれてきて、前ほど自分の名前が気にならなくなってきた。やっぱり、自意識過剰だったのかな……。

と、まあ、そんなわけで、晴香達と親しくなったおかげで、思いがけず、一人ぼっちで不安だった中学生活のスタートが、ずいぶん楽になった。

泉啓子(いずみけいこ)「夕焼けカプセル」より

【一部に表記の変更(へんこう)があります。】

問一——線①「覚悟はできていた」とありますが、どういうことに対する覚悟ができていたのですか。

本文中から十五字でぬき出して答えなさい。

問二——線②「同じようなことを考えてるんだ」とありますが、「わたし」と女の子の二人は、どういう

ことを考えていたのですか。解答欄の言い方にあうように三十五字以内で答えなさい。

問三——線③「わざと大きさに、しょんぼりして見せた」とありますが、「わたし」がこのような態度

をとった理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 女の子の言葉に傷ついたことを伝えたかったから。

イ 女の子と、もっと打ち解けて話したいと思ったから。

ウ 女の子に、本当は落ち込んでいないことを示そうとしたから。

エ 女の子のことがうらやましいことをかくしたかったから。

問四——線④「初対面の人と、あんなに話せたなんて、自分でもびつくりだった」とありますが、そ

れは、「わたし」が自分をどんな性格だと思っていたからですか。本文中から四字でぬき出して答えなさい。

問五——線⑤「一瞬、(どうしよう)と迷った」とありますが、「わたし」がこのとき、下の名前を言

うのをためらったのはなぜですか。解答欄の言い方にあうように、二つ答えなさい。

問六 本文中から読み取れる晴香の性格として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 協調性が高く、周りに合わせて行動することができる性格。
イ 頭の回転が速く、人とはちがう観点から物事を分析できる性格。
ウ 元気がよく、自分の気持ちをすなおに表現することができる性格。
エ 気配りがうまく、さりげなく友達を助けることができる性格。

問七 本文の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「わたし」と晴香、奈穂の三人が出会い、時間をかけて友達になるまでのいきさつを、時間の流れに沿ってえがいている。
イ 入学式に出席している現在の「わたし」が小学校時代の思い出をふりかえり、かつての友人をなつかしむ姿をえがいている。
ウ 現在の「わたし」が入学式のことを思い返す形で、晴香との出会いが自分にとって印象深いものであったことをえがいている。
エ 現在の「わたし」と二週間前の「わたし」の様子を交互に語り、二週間で人間関係がめまぐるしく変化した様子をえがいている。
オ 「わたし」が晴香と奈穂との交流を通じ、自分の知らなかった一面に気づくまでの姿を、季節の移り変わりとともにえがいている。

— 4 —

2

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 科学には、動物学には、こうして② ツミかさねて進歩し、人類が新しいことを知ったり、新しい考えかたを身につけたことを、未来に伝えていく役割があります。そのことをわたしたちは「文化」とよびます。

記録のついた標本を大切に引きつぐことで、③ 未来の文化を築いていく。それこそが今、わたしがなくてはならないことだと考えているのです。

科学のおもしろさとは発見をすることです。まだだれも知らないことを、人類で最初に自分の手で見つけだし、つかみとることです。でも、多くの科学者は、そのことを文字で残すことはあっても、発見の中身を標本で残すことはしてきませんでした。

しかし、いろいろな動物や植物、化石や岩石についてたくさんを知ろうとする科学では、標本をまるごと残して、未来の人たちにその発見の中身を④ タシかめてもらうことが、必要なときがあります。ですから、できるだけ多くの標本を未来の人類になう子どもたち、つまりみなさんにたくしていきたいと思います。そうすることで、文化は⑤ 発展します。

時どき、わたしはたずねられます。

「遠藤さんは、一年に何体くらいの動物を骨格標本にしているのですか？」

これは、じつは答えるのが少しむずかしい質問です。たとえば、大きなゾウやキリンも一体だし、手のひらにのるネズミも同じ一体と数えることになってしまいます。

ゾウ一体をつくる努力で、ネズミ一〇〇体くらいはつくれる感じがして、一年間に自分がつくっている骨の量を、数であらわすのがとてもむずかしいのです。それに、大きなものでは、完成させるのに、三年も四年もかかります。なかなか、一年間にふえる骨格標本の数というのは考えにくいものなのです。

「すぐくおおざっぱですが、五〇〇体から千体でしょうか」

そんな答えかたをしてきました。そういう仕事をしてきた結果として、たとえばわたしの働いていた博物館には、今およそ三万体の骨格標本が集まっています。

では、なぜこんなにたくさんさんの死体を、骨などの標本にして残しているのでしょうか？

その答えは、みなさん自身でも考えることができるくらいに、この本でいろいろなことを学んだと思います。ここでは少しだけ、わたしの考えを書くので、みなさんでもつとつと⑥ ソウダンをして、いろいろな意見を出しあってみてください。

一つに、博物館はなんのためにあるのか、という話題があります。

いつも思っていることは、博物館とは、人間がものごとを考え、なやんできた道すじや、人間が自分でつかんだ事実を、実物といっしょに未来まで残していくところだということです。

さらに、「文化」ということばを使いました。まさに文化のためにこそ、博物館があります。

たとえば、わたしはパンダのホアンホアンをかいほうして、パンダの指の数を数えました。ゾウの

— 5 —

加奈子をたくさんの人たちといっしょにかいほうしながら、ゾウにはとても大きな美しい内臓があることを、人びとに伝えてきました。オオアクリイの口を調べていたら、アリを食べるときに口をハの字形に開いていることが発見できました。マダガスカル島のエビオルニスというなぞの鳥を調べていたら、とても大きな卵をうむ、世界最大の鳥ではないかということが少しづつわかってきました。イノシシは北に行くほど大きくて、それはどうやら寒さにたえるための進化だということが見えてきました。

わたしは思います。わたしが発見したそれぞれのことはとても小さく、人間が動物について知っていることのわずかな部分でしかないでしょう。でも大切なのは、こうして発見したことや感じとったことが、何人、何十人、何百人、そして何年、何十年、何百年と、標本といっしょに引きつがれていけば、人間はまた次の新しい事実を見つけたそうとするにちがいない、ということです。それは、人類の希望といってもよいでしょう。

おじいさんやおばあさんの知っていることがお父さん、お母さんに引きつがれ、お父さんやお母さんがまた新しい事実を発見し、そしてみなさんの世代がそれを受けついで、また新しいことを見つけようとするのです。

そうです。③「好奇心」です。

博物館は、だれかが新しいことを発見し、その発見したできごとをもとに、また研究をつみかさねて、さらに新しいことを知っていくとする、そういう人間のがんばりがいつまでも終わることなく続く「好奇心」の場所なのです。

そして博物館は、いろいろな人たちがいつも集まってきて、そこでなにかを学ぼうとし、一歩ずつでも成長していくとする、「学びの場」になっていることを忘れてはいけません。

とくに最近では、お年寄りが世の中にふえました。また若い人も、人それぞれに興味や考え方がちがうという世の中をむかえました。学校でみなさんは、だれもが同じことを学びますが、それだけではみんなの「好奇心」を満たすことができません。博物館は、とくに今の時代には、たくさんの人がそれぞれの好奇心をもつてなにかを知ろうとする、多様な学びの場としての役割を果たしているのです。

みなさんだけでなく、おとももおちいるまちがいに、博物館は遊園地と同じ、遊び場だとする考えかたがあります。デパートやレストランと同じように、お客さんがお金をはらってサービスを受ける場ではないか、というあやまった考えかたです。

しかし、本を読んできたみなさんは、博物館が遊び場でないことはもうおわかりでしょう。

博物館は、たくさんさんの標本をいつまでも大切にとっておくところです。標本には、この本に出てきたような動物の骨のほかにも、いろいろあります。はくせいやアルコールにつかった死体、植物のおしばのような標本、恐竜などの化石標本、岩石や鉱物をうすくけづつた標本、ヒトの骨、そのほかにも、土器や石器や昔の人のさまざまな道具類、そして、古い時代の文書までもがふくまれます。

パンダのところでふれたアメリカのシミソニアン博物館やアメリカ自然史博物館、デービス博士が活躍していたシカゴのフィールド自然史博物館などは、こうしたばうだいな標本をかたっぱしから集

めてきています。博物館とは、そうしたたくさんさんの標本をいつまでも保管して、研究をし、新しい考えかたや、人類の新しい知識をつかんでいくところなのです。それこそが、人類がもちつづけなくてはならない文化なのです。

ウィーンの博物館がお手本を見せてくれたように、標本は二〇〇年でも三〇〇年でも、いつまでもとっておくものです。今から三〇〇年後に、みんなが博物館にもちよつた骨や化石を研究したいという人があらわれて、いっしょうけんめいに研究してくれるなら、これほど楽しいことはありません。

博物館には、いろいろな好奇心をもった人がどんどん集まってきます。そういう人たちといっしょに、昔から大切にされている標本を利用して、新しい考えかたを社会のみんなにしめしていくのが、博物館のほんとうの姿です。

「学びの場」

そして、

「標本たちが未来にいつまでも引きつがれていく場」

そして、

「文化を築く場」

それこそが博物館です。

そんな考えかたを大切にして、博物館のこれからをみなさんで考えていってくれたら、わたしはうれしく思います。

遠藤秀紀「見つけるぞ、動物の体の秘密」より

【一部に表記の変更があります。】

問一 — 線①「科学」とありますが、科学のおもしろさとはどんなことですか。解答欄の言い方にあうように五字でぬき出して答えなさい。

問二 — 線②「未来の文化を築いていく」とありますが、筆者の考える「文化」とはどういうことですか。解答欄の言い方にあうように三十九字で探し、最初と最後の五字で答えなさい。

問三——線③「『好奇心』です」について、次の問いに答えなさい。

1 「好奇心」とは、ここではどのような気持ちですか。解答欄の言い方にあうように十五字以内で答えなさい。

2 「好奇心」を満たすために博物館がなくてはならないことは何ですか。解答欄の言い方にあうように二十字以内で答えなさい。

3 「好奇心」を持つ人にとって、博物館はどのような場所だと言えますか。解答欄の言い方にあうように十字以上二十字以内で答えなさい。

問四 現代に博物館が求められている理由として適切なでないものを選び、記号で答えなさい。

ア 学校以外でも学習する場を必要としているから。

イ 異なる世代ごとにそれぞれ興味や関心が違うから。

ウ 高齢者の学習する場が必要になってきたから。

エ 年齢や考え方に関係なくみんなが遊べる場所だから。

問五 本文の説明の仕方として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 最初に博物館の役割を簡単に説明し、あとからそれについての具体的な説明を加えている。

イ 筆者の経験をふまえながら、博物館とはどういうところなのかを、言葉をかえながらくり返し説明している。

ウ 具体的な数値をたくさん引用して、博物館の必要性を読者にわかりやすくうたっている。

エ 科学者のあるべき姿とはどういうものかを、博物館の未来をになう読者に向けて語りかけるように説明している。

オ 現在と未来の博物館の特徴を交互に並べて比べていて、そのちがいははっきりわかるように説明している。

問六 〰線①・②・③・④・⑤のカタカナは漢字に、⑥・⑦の漢字はひらがなに直しなさい。

① ツ (み)

② タシ (かめて)

③ 発展

④ ソウダン

⑤ 興味

3

次の問いにそれぞれ答えなさい。

問一 次の1～5の文の□に入る言葉をあとのア～コから一つずつ選び、記号で答えなさい。
(同じものは二度選べません)

1 彼は何度同じ失敗をくり返しても□こりない。

2 その操作ミスは、□大事故につながるところだった。

3 かれは□家でじっとしていることだろう。

4 □時間があるなら、いつしよに行きませんか。

5 母の作るオムライスは、□満月のようにまるくて黄色い。

ア ちつとも イ あわや ウ 二度と エ たとえ オ まるで

カ まさか キ もし ク よもや ケ おそらく コ どうして

問二 次の1～5のそれぞれの組の漢字に共通する部首名をあとのAから、その部首の表す意味をBからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

1 [利・判・別] 2 [庭・店・広] 3 [空・究・窓]

4 [通・運・送] 5 [点・然・照]

A

ア しんによウ イ さんづくり ウ わかんむり

エ あなかんむり オ まだれ カ がんだれ

キ やまいだれ ク りつとう ケ くになまえ

コ れんが(れつか)

B

ア 刀に関する漢字であることを表す。

イ 家や建物に関する漢字であることを表す。

ウ 火に関する漢字であることを表す。

エ 道に関する漢字であることを表す。

オ 空間に関する漢字であることを表す。

受験番号	
.....	
氏 名	
評 点	

小計 2

小計 3